連載小説
まちおこし特命社員 石打悠太

「馬鹿者」を命ず!

第三十四回 悠太、馬鹿者になる その一 渋谷和宏

イラスト●丹下京子

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた） 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

四分地恒三（しぶち・こうぞう） 59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

亀田太（かめだ・ふとし） 29歳、伊予南市役所・地域振興課員を解雇され、新庄の部下として伊予南プロジェクトの社員となるが……。

ショーン・次川（つぎかわ） 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。

大渡薫子（おおわたり・かおるこ） 21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘で榎太一の孫。京大阪大学で建築を学ぶ。

榎太一（えのき・たいち） 76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。

青山麻衣（あおやま・まい） 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

堤誠一（つつみ・せいいち） 71歳、元大阪の大手電機メーカー社員、再婚を決意し「パン焼き工房・まつしま」で披露宴を開く予定。

花咲かえで（はなさき・かえで） 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

「何だって!?」

四分地は受話器を持ったまま立ち上がり、悠太たちに言った。

「亀田くんが逮捕された。傷害と器物損壊の現行犯だ」

言葉を失っている悠太たちに四分地は続けた。

「俺はすぐ所轄の警察署に行くから、後を頼むぞ」

夕刻、四分地から電話がかかってきて、電話口に出た悠太に亀田が巻き起こした事件について一通り説明してくれた。

亀田はヴィンセント・ファンドのショーン・次川副社長から『処遇については悪いようにはしないから伊予南市に復讐してみないか?』と持ちかけられた。

亀田はその気になりかけていたが、次川が自ら望んでニューヨーク本社に転勤するのを知り、逆上して今回の行動に出た――。

「亀田さん、やはり次川さんに唆されていたんですね」

悠太はいつもと違う亀田の様子を見て、何か良からぬ計略を胸に秘めているのではないかと不安に駆られたのを思い出した。悪い予感は的中していたのだ。

「それで……亀田さんは伊予南市への仕返しのためにもう何かをしでかしてしまったんでしょうか?」

「問題はそこだな」

四分地は思案気に言った。

「ショーン・次川が亀田に接触してからそれなりの日にちがたっていることを考えると、すでに妨害のための行動を起こしていてもおかしくはない。しかも所轄署の刑事はこう言ったんだよ。『亀田はそれについてはいっさい口をつぐんでいる』と。『否定している』とは言わなかったんだ」

「まさか……」

「石打、お前の言う通り、そのまさかの事態を想定しなければいけない状況だぞ。刑事が言うには亀田は伊予南市を憎んでいるらしい。次川はそれを知って亀田を唆したのだろうな。警察はいずれ次川からも事情を聴くだろうが、まごまごしていると取り返しがつかない事態にもなりかねない」

「次川は今どこに……?」

「病院に入院したそうだ。ペンキを飲み込んでしまったらしく胃の洗浄が必要らしい。大事には至らなかったそうだが……。お前、行ってみるか?」

悠太は「はい」と言い、四分地は病院の名前と住所を告げた。

あの次川のことだからどんなに追及したところで計略を打ち明けるはずはないだろう。しかし面と向かって罵倒してやらなければ気が済まない。

地下鉄日比谷線の広尾駅に近い病院を訪ねた時、日は西に傾きかけていた。

一般病棟の受付で次川の部屋番号を聞いた悠太はまなじりを決し、エレベーターに乗り込んで指定された階で下りた。

廊下を大股で歩き、突き当たりの部屋の前に立つ。

そこは個室でドアはなく、若い女性がベッド脇のパイプ椅子に座っているのが見えた。女性はやや前かがみになり、ベッドに横たわる次川の右手を両手で握っている。

その後ろ姿には見覚えがあった。一本にまとめた長い黒髪、白いうなじ……。

よく知っている女性にそっくりだ。

「まさか……」

部屋に入るのをためらったその時、女性が振り返り、悠太は全身を硬直させた。

「薫子さん!」

「石打さん!」

薫子が切れ長の目を見開いた。涙を流していたらしく、その目は赤く充血している。

「君か……」

ベッドに横たわっていた次川が悠太に気づき半身を起こした。

「ど……どういうことですか……?」

悠太は二人に向かって必死に声を絞り出した。

わけが分からなかった。なぜ薫子が次川の病室にいるのだ? しかも次川の手を握り、涙を流していただなんて……。

もしかして今、悪夢を見ているのだろうか? しばらくすればこのおぞましい夢から覚めるのだろうか?

「『どういうこと?』とあけすけに問われてもね。どう説明したものかな」

次川が皮肉めいた笑みを浮かべた。

「あたしから説明するわ」

薫子は立ち上がり、悠太に正対した。

前回までのあらすじ

伊予南フェアの失敗を狙う亀田を広岡が訪ね、ショーン・次川のニューヨーク転勤を告げる。騙されたと逆上した亀田は次川を待ち伏せしペンキをぶちまけた。一方、広報ビデオを作る麻衣のアイデアを聞き、悠太が閃く。

大正大学地域構想研究所ホームページ（http://chikouken.jp/chiikijin）では、連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

「あたし……この人……ショーン・次川と付き合っているんです。大学を卒業したら結婚したいと思っています」
「え？」
「恋人同士になって、もう一年が経つわ」
「嘘でしょう？」
薫子はかぶりを振った。
「本当よ。ごめんなさい」
「……」
悠太は呆けたように口を開けて、薫子と次川を交互に見た。
薫子に初めて会った時、悠太はコスモスの花のように可憐だなと思ったのだった。
その薫子がよりによって四十五歳のいけすかない男と交際しているだなんて。しかも次川は伊予南フェアを妨害するために亀田を利用していたのだ。
もしかして、これはドッキリではないか？　そうだ、薫子は悠太をかついで慌てさせようとしているのに違いない。
「あの……薫子さん、今の話、ウソだよね？　僕をかつごうとしているんでしょう？」
薫子はもう一度、かぶりを振った。
そうか、これはやはり夢なんだと悠太は思った。右手で左手の甲を思いきりつねってみる。痛みをはっきり感じた。
「なぜ……」
悠太は震える声を出した。何のためにここにやって来たのか、目的はもうどうでもよくなっていた。そもそも何のためにここに来たんだったっけ？
「なぜ僕たちが交際しているのか聞きたいのか？　それは僕から説明しよう。僕の方から薫子に近づいたんだ」
次川が言った。
「石打くん、君は清谷の霞庵での僕と二名島バッテリーの榎社長のやりとりを聞いていただろう？　榎さんの言う通り、僕の父は伊予南セラミックスという小さな町工場を経営していて、追い出されるようにして伊予南市を出ていったんだ。電子部品向けの高機能セラミックスを作ろうとしていたが、地元の金融機関からの追加の融資を受けられなかったばかりか、『うるさい』『臭い』などと周りの住民たちから立ち退きを迫られてね。伊予南セラミックスはその二年後に倒産し、父は失意のうちに死んだ」
悠太は二人のやり取りを思い出した。
榎はさらに「次川の父親の死因は自動車事故で、次川は父親がかけていた保険金を受け取り、その金で大学に進学し、さらにアメリカに留学してＭＢＡを取得した」『父親の死はもしかしたら自殺だったのではないか』とも言っていた。次川は動揺を顔に浮かべていた……。
「僕はいつか父の恨みを晴らしてやろうと思うようになった。『父は伊予南市の連中に殺されたようなものだ。いつか必ず復讐してやる』とね。アメリカに留学してＭＢＡを取得したのも、ヴィンセント・ファンドに入社したのも、その思いが原動力だった。二年前のことだ。大阪に出張した折に足を延ばして数十年ぶりに伊予南市を訪れた。どうやってこの町に泥を塗ってやろうかと考えながら駅前商店街を歩いていた時、薫子を見かけた。大渡市長と一緒だった。市長の顔はホームページなどで知っていたからすぐに娘だと分かったよ」
次川は遠くを見るような目をした。
「僕は薫子に興味を引かれて、ヴィンセント・ファンドが日ごろ仕事を発注している信用調査機関や興信所を使って薫子について調べてもらった。そして偶然を装って接触した。市長の娘だから何かしら利用価値があるんじゃないか、弱みを握ることができたらさらに好都合だと考えたんだ。もっとも当時はそんなつもりでいたけれど、今からすれば心の奥底では薫子に引かれていたのかもしれない。やがて時々会い、食事する仲になり、半年後、男と女の関係になった」
「やめてください！」
悠太は声を荒らげた。二人には悲鳴のように聞こえたかもしれない。

「そこまで話してくれとは言っていません！」
「少し前に『もう会わない方がいい』と次川さんは言ったんです」
薫子が言った。
「次川さん、あたしの大学の近くまで来てくれて、すべて打ち明けてくれました。次川さんの父親のこと、あたしに近づいてきた理由……そして『もう会わない方がいい』『別れよう』って……」
「清谷の霞庵で、榎さんは僕に『薫子と大学近くの喫茶店で会っていたと探偵に聞いたが、何を話したんだ』と質問しただろう？　それはその時のことだったのさ」
「別れるんですか？」
次川は悠太の質問には答えず、薫子を見た。
薫子は先ほどよりも大きくかぶりを振った。「別れない」そんな強い意志が込められた否定だった。
「一時はあたしも気持ちが揺れて、石打さんを好きになってみようとしたことがありました。でも……今は次川さんのことを信じています」
薫子は次川を見つめ、次川が薫子を見つめ返す。悠太は二人を正視できず天井を見た。下を向いたら涙がこぼれ落ちてしまうかもしれない。
「次川さん、教えて？　あなたは亀田さんという人に何をさせようとしたの？」
次川が薫子から目を逸らす。
「あなたはあの日、父親のことや伊予南市への思い、あたしに近づいてきた理由を話してくれた。あの日と同じようにすべてを話して！　そしてとらわれていた過去から自由になって！」
悠太は何のためにここにやって来たのか思い出した。
次川を問い詰めるためだった。僕はまちおこし特命社員なのだ。伊予南フェアを成功させなければならない使命がある。
「次川さん、僕からもお願いします。取り返しがつかないことにならないうちに話してください！」
次川は薫子と悠太を交互に見た。
「お願いします。薫子さんを裏切らないでください」
そう言いながら悠太の目から涙がこぼれてきた。短い間に二度目の失恋だ。彼女だった麻衣に振られ、薫子へのほのかな想いももはや叶わないと知った。
次川は視線を窓に向け、じっと考え込んだ。しばらく身じろぎもせず、やがて意を決するように小さく息を吐いた。
「数日前、亀田くんから電話がかかってきた。『西朱雀地蔵通り商店街から遠からず近からずの場所にある、レンタル倉庫かトランクルームを借りてほしい。僕、荷物の届け先を変えたいんです』と言った」
「荷物？」
悠太が聞いた。
「伊予南フェアで販売する伊予南市の名産・特産品だよ。亀田くんは『それらの荷物を買い取ってくれる業者を探してほしい』とも言った」
「亀田は荷物が西朱雀地蔵通り商店街に届かないようにするつもりだったんですね」
「そういうことだ」
次川はベッドサイドに置いた鞄から手帳を出し、ページを破って悠太に渡した。トランクルームの住所と電話番号が書いてあった。
「ありがとうございます」
悠太は次川に会釈して手帳のページをポケットに入れた。
「せいぜい頑張ってくれよ。まちおこし特命社員、石打悠太。榎さんが君のことを見どころがあると言っていたのが分かる気がするよ。それに引き換え……」
次川は苦笑いした。
「結局、僕はワルに徹することができなかった。ショーン・次川という人間の限界だな。今度の一件で僕はヴィンセント・ファンドを解雇されるだろう。少なくともニュ

まちおこし特命社員
石打悠太

「馬鹿者」を命ず！

ーヨーク行きは無くなった。いずれ警察は僕からも事情を聴くはずだからね。薫子、榎さん……君の御祖父さんは僕にこうも言ったんだ。『君の父親は君を受取人として自身に保険をかけていた。そして自殺の可能性を否定できない……私も人の親だからね。君の父親の真意は、伊予南市に意趣返ししてほしいとか、恨みを晴らしてほしいとか、そんなところにあるはずはないと今では確信しているよ。君の父親は君にまっとうな人生を歩んでほしいと望み、君に未来を託したんだ。だから最期のギフトを贈ったんだ』と。僕は『なぜそう思うんですか？』と聞いたら、榎さんはこう言った。『親心とはそういうものだからだ』」

悠太も二人のやり取りをよく覚えていた。

次川は榎を見つめ「それを言いたくて私をここに呼んだのですか？」と言ったのだった。

「あの一言で、僕はすでに負けていたんだ」

次川がぽつりと言い、息を吐いた。それは口惜しさよりも、安堵の溜め息のように聞こえた。

「負けてくれて良かったわ」

薫子は次川の手をまた握りしめた。

悠太は二人から目を逸らし「さよなら」も言わずにそっと病室を出た。

誰かが木琴を叩いている。短いフレーズを何度も何度も繰り返しているのは練習のためだろうか。

木琴じゃない。ケータイが鳴っているのだ。

悠太は目を開けて起き上がった。西朱雀プロジェクトが借りてくれたウィークリーマンションのベッドに横たわっていたのだった。

時刻は午前九時半を回り、カーテンの隙間から日差しが入り込んでいる。テーブルや床にはワインの小瓶やビールの空き缶、発泡スチロールのトレーが散らばっている。

悠太は次川の病室を出てからの行動をすぐに思い出した。コンビニでワインの小瓶二本とビール三本、焼き鳥やチャーシューなどのつまみを買い、ウィークリーマンションの部屋に戻って一人でやけ酒を飲んだのだった。

酔っ払い、泣き寝入りしたまま朝まで横になってしまったらしい。

「いけね！」

悠太はケータイを手に取った。麻衣からだった。

「とっとと出なさいよ！　もう！　いつもいつも焦らせるんだから。悠太、いまどこにいるの？」

「西朱雀プロジェクトが借りてくれたウィークリーマンション……」

「寝ていたの？　そうなんでしょう？　いつまで寝ているのよ！　とにかく悠太に行ってもらいたいところがあるのよ」

「どこ？」

「モニターのあるところに決まっているじゃない！　今、堤誠一さんが婚約者の方と『パン焼き工房・まつしま』にいらっしゃっているのよ。それだけじゃないの。堤さんたちの趣味のサークルの仲間たちも何人か下見と打ち合わせに来てくれたのよ」

「それが、僕がモニターのあるところに行かなければならないのとどう関係があるのかな？」

「決まっているじゃない！　実証実験をするのよ。伊予南フェアの期間中、結婚式やダンス会の映像をアンテナショップで流し続けるんだから、こちらでの様子がちゃんとネットで中継できるかどうか確かめる必要があるじゃない。その実験をいまからやろうと言っているのよ。だからまごまごしていないでとっとアンテナショップに行ってよ！」

ウィークリーマンションを出た悠太は商店街の中ほどにある仕舞屋の鍵を開け、中に入っていった。

間口二間ほどの店内にはすでにアンテナショップにするためのイスやテーブル、什器などが運び込まれ、六十インチの大型モニター二台と通信用のサーバーがテーブルの上に置いてある。設定はすでにかえでが済ませてくれていた。かえではパソコンやネットにもかなり詳しいのだ。

悠太は麻衣に電話を入れた。

「着いたの？　そうしたらモニターのスイッチを入れてくれる？　こちらはもう準備できているから」

悠太がモニターのボタンを押した数秒後、六十インチの大型画面に伊予南市の遠景が

映し出された。

眼下には山々のこんもりした緑が続き、森が途切れるあたりから市街地にかけて田園が広がっている。そのほぼ真ん中を一筋の河が伸び、海へとつながっている。雲間から顔をのぞかせた太陽に照らされて、海面は宝石をちりばめたように美しくきらめいている。「パン焼き工房・まつしま」の庭から見下ろせる伊予南市の風景だ。

伊予南市を離れて数日しかたっていないのに悠太は胸が締めつけられるような懐かしさを覚えた。

ふいに喪失感が募り、大型画面に映る伊予南市の遠景が滲んだ。涙がこぼれてきたのだ。

「どう？　ちゃんと映っている？」

「うん、きれいだ」

「じゃあ、これは」

画面が麻衣のアップに切り替わった。どうやらカメラを自分に向けているらしい。

「堤さんたちを映すわよ」

画面に堤誠一と婚約者の二人が映し出された。二人とも幸せそうで、照れたような笑みを浮かべている。婚約者は六十代だろうか。ショートカットが若々しく、スカートから伸びたすらりとした脚が美しい。

「続いてダンスよ」

音楽が流れてきた。やがて画面に四人の男女が映し出され、美しい伊予南市の風景を背景に社交ダンスを始めた。ワルツだろうか？　悠太にはダンスのことはよく分からなかったが、四人の動きはきびきびとしており、音楽にとてもよく合っていた。

「そうだ。これだ……」

榎を翻意させるためのアイデアが明確な形になっていくのを悠太は意識した。

伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがあるという証拠になり得るだろうか？

これが最後の挑戦だと悠太は思った。

Kazuhiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・大正大学表現学部客員教授。
1959年、横浜市生まれ。日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、
『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、『日経ビジネス』発行人などを務めた後、2014年3月、独立。
1997年に長編ミステリー『錆色（さびいろ）の警鐘』（渋沢和樹の筆名、中央公論新社）で作家デビュー。
著書に『罪人（とがびと）の愛』（幻冬舎）、『稲盛和夫　独占に挑む』（日本経済新聞出版社）、
本名・渋谷和宏で『文章は読むだけで上手くなる』（PHPビジネス新書）など。
TV、ラジオでコメンテーター、メインキャスターも務める。